

全般事例 1

揺れる気持ちに寄り添う

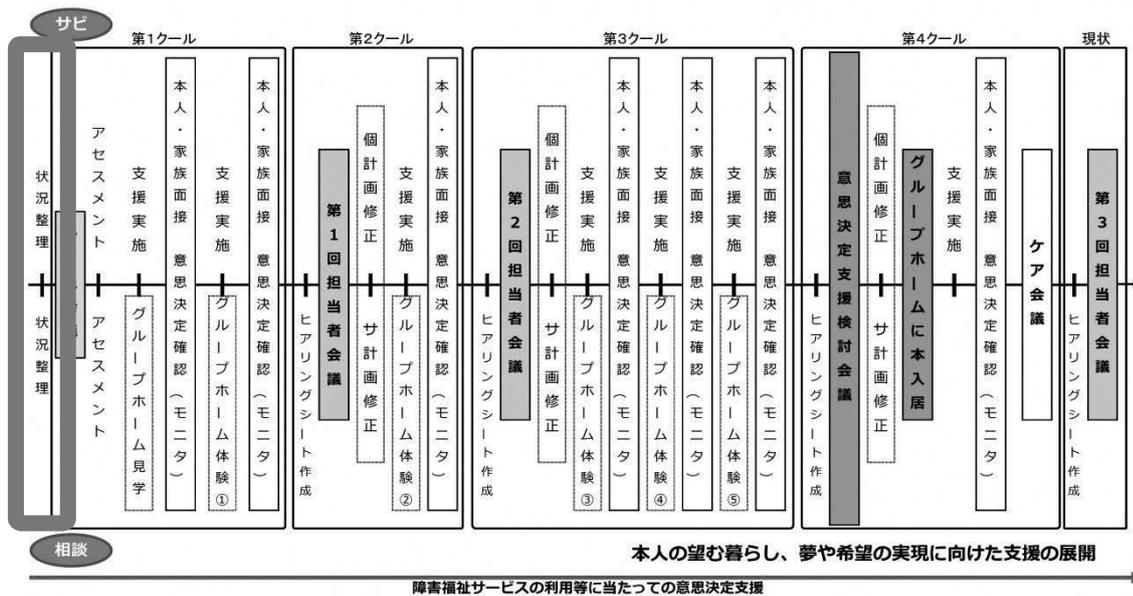
1 事例の概要

- 自分の意思を言葉で伝えることができるHさんは、社交的で人と話すことが大好きで、とても家族を大切にしている。反面、待つことが苦手で、気に入らないことがあると声を荒げて怒ることがある40代の女性。
- Hさんの望む生活である、『お母さんに会いたい。引越してお母さんやお兄さんのそばで暮らしたい。食べたい物や欲しい物がたくさんある。外出してたくさん買い物したい。好きなアニメのDVDを見たり、折り紙やアクセサリを作るのが好き。お仕事を頑張りたい。楽しく過ごしたい。たくさんお話したい。元気に過ごしたい。』ことを実現するため、日々の暮らしの中で意思決定支援を展開し、Hさんの思いを繰り返し丁寧に聞き取りながら、日常生活を豊かにするために余暇活動の充実を図るなど、様々な経験や体験を重ねた。
- グループホームでの生活体験を進めていく中で、支援チームが、揺れ動くHさんの気持ちにチームとして寄り添い、同時に、家族の気持ちにも寄り添いながら、Hさんの望む生活を実現するために支援を重ねていくことで、Hさんは、障害者支援施設から、Hさんが望んでいた家族にすぐに会えて、好きな買い物や外出ができる、実家近くのグループホームに移行することができた。

2 基本情報

対 象 者： Hさん 女性 40代
主たる障害： 最重度知的障害 てんかん
その他手帳： 精神障害者保健福祉手帳1級
障害支援区分： 6
親族関係： 母、兄
居 所： 在宅（持家） → 障害者支援施設
移 動： 車椅子を使用。室内であれば自分で移動可能
人 柄： 言葉で自分の意思を伝えられ、社交的で人と話しをすることが大好き
既往歴： 緑内障の疑いで定期的に医療機関を受診

第0クール：意思決定支援開始の準備（状況整理等）



1 本クールの概要

- サービス管理責任者と支援者は、園で保管しているHさんの個人情報（フェイスシート、アセスメントシート、健康カード、個別支援計画、個人記録等）を確認しながら、その情報を最新の情報に更新し、また、不足している情報を追加した。
- 相談支援専門員は、サービス管理責任者とともに、ストレングスモデルの視点からヒアリングシートに情報をまとめた。

2 状況整理① 生活史等

(1) 出生から学齢前まで

幼少期に盲腸のため全身麻酔で手術を受けた。術後の経過は良好だったが、以降、てんかん発作を発症した。1歳頃、兄が繰り返し口にしてた英語や数字を覚え、口にするようになった。3歳から市内の保育園に通所。衣類のポケットに大切な物を入れることが多く、ポケット付きの衣類を好んで着用していた。

(2) 学齢期

小・中学校は普通級に通学。内服薬が強かったためか授業中寝ることが多く、頭痛や腹痛を理由に欠席が多かった。母と兄は養護学校高等部への進学を希望していたが、商店を営む父がHさんの発作や通学を心配し進学に反対し、進学せず家業や家事を手伝った。家業の手伝いはHさんには難しく、テレビを見たり刺繍や絵を描くなどの生活が続いた後、生活訓練指導のため通所支援施設に通った。その後、養護学校高等部に1年遅れで入学した。高等部在学時は、好奇心旺盛で活発、運動が得意でマラソン大会では好成績を残した。

(3) 養護学校卒業後からL障害者支援施設入所まで

高等部卒業後、短期入所を利用しながら在宅生活を送る。自宅では家事を手伝い、「私がやる」「自分でやる」など自立心があったが、母と意見が合わないこともあった。Hさんが30代前半に父が逝去。その後、母の高齢化に伴い、短期入所の利用日数が増加。母の体調悪化により在宅生活に困難が生じ、30代半ばにL障害者支援施設（以下「L施設」という。）に入所した。

(4) L障害者支援施設入所後から事件前まで

ア 入所当初

一日の多くを居室で過ごしDVD鑑賞を好んでいた。Hさんが希望するものは母が購入し来園時に渡していた。母の面会は月3～4回あり、居室で昼食を食べるなど楽しく過ごしていた。入所直後はてんかん発作、ふらつきや転倒もあった。肺炎による入院以降、手足のむくみ、立位が保てなくなるなど体調を崩すこともあった。日中活動では、手芸作品を作り、作品を他の利用者にプレゼントするなどの優しさがあった。

イ 入所3年目

施設での生活にも慣れてきて、時折、大きな声を出す利用者に怒ることもあったが、他の利用者が困っているときは「どうしたの」と声をかける姿もあった。足のむくみと体重増加のため、日中活動で平行棒を使い、足を動かす運動を開始し、意欲的に参加していた。また、支援者との関わりを楽しみ、折り紙やアニメのDVD鑑賞などをしていて、家族が毎週面会に来て、居室で家族が持参したご飯と一緒に食べるなどしていた。

ウ 入所4年目

体調は安定してきたが、てんかん薬により呂律が回らなくなることがあり、服薬調整を行った。日中活動やカラオケ、買い物に出かけるときは、化粧やアクセサリを身に着けるなどおしゃれをし、支援者に「きれいにできたよ」と笑顔で話していた。外出時には、前日から買いたい物を決めて出かけていた。日中活動では平行棒に取り組み、歩けた日には「お母さんには内緒だよ」と嬉しそうに話をする姿もあった。この頃、母は体調を崩し、面会が月1～2回に減り、母の入院時には面会が途切れることもあった。家族に会えないときは、Hさんは母に手紙を書き、母からの返信があると笑顔で喜んでいた。

(5) M障害者支援施設への転居後

入所4年目に起きた事件により、M障害者支援施設（以下「M施設」という。）へ転居。M施設では2人部屋となった。Hさんは、居室のレイアウトにこだわり、納得いくまで何度も変更した。転居に伴う支援担当者の交代で、意思疎通ができずイライラすることがあった。M施設は外出しやすい場所にあるため、大好きな買い物に行きやすくなった。日中活動は転居前後で変更なく、居室でのDVD鑑賞もしていた。この頃から、母は体調を崩し、面会に来られなくなった。Hさんは母に手紙を書き、その返事を楽しみにしていた。

3 状況整理② 選好、嗜好等

好き・喜び・楽しみ等	嫌い・苦手・不快等
<ul style="list-style-type: none"> ○ 家族 ○ 家族へ手紙を書くこと ○ 人と話すこと、異性との交流 ○ 好きなテレビ番組やアニメを観ること ○ アクセサリー作り、塗り絵、作った折り紙を支援者にプレゼントすること ○ うさぎの人形、しゃべるハムスター人形 ○ おしゃれ 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 待つこと、自分のやろうとしたことを止められること ○ 他の利用者から嫌なことをされたことをずっと覚えている ○ 嫌がることをされること、やりたいことができないこと ○ にぎやかな場所

4 状況整理③ 意思能力、表現方法等

- 簡単な言葉は理解し、言葉による意思疎通が可能。自分の要求や出来事を言葉で表現することができる。
- 拒否は言葉や態度で表現し、嫌なときは大きな声を出す。
- 視覚情報で多くのことを理解し、手紙も書くことができる。表情も豊かである。
- 気に入らないことがあると、大きな声を出したり、物を壊したり、投げたりするなど、情緒面での波がある。意にそぐわないことは聞こえないふりをすることもある。
- 分かりやすく説明することが必要である。
- 自分よりも重い障害のある方に対して優しい。
- 寮の中では、自分が一番との気持ちがある。
- 頑張り過ぎて疲れてしまい動けなくなることがある。その加減が自分で分からない。
- 人へプレゼントすることが好き。自分が、誰に何をプレゼントしたかよく覚えている。

【この時点での関係者の所感・取組み】

M施設サービス管理責任者（支援者）	相談支援専門員
<ul style="list-style-type: none"> ○ 改めて家族からHさんの幼少期のエピソード等を聞き取ることで、Hさんの本人像を深めることができた。 ○ Hさんのストレングス。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 要求や出来事を言葉で表現できる ・ 好きなことややりたいことが多くある ・ 在宅生活が長く、日中過ごす場所への通所経験がある ・ 家族思いである ○ チームとして今後進めていくことを確認した。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ サービス管理責任者及び支援者等から家族に連絡を取ってもらい、フェイスシートに書かれていないHさんの幼少期のエピソードを知ることができた。 ○ 以前のHさんのエピソードを知ることで、もともと力がある方だと分かった。 ○ 元気だった頃のHさんと現在のHさんのギャップを感じた。 ○ 本人像と今後の方向性を確認し、チームで動いていくことを確認した。

5 本クールのまとめ

(1) 関係者が意識した役割・配慮点等

M施設サービス管理責任者（支援者）	相談支援専門員
<p>○ 支援者は変則勤務なので、支援者間でどのように情報を共有し、議論できるかを考え、記録を工夫した。また、記録に支援者の思いも書き込むようにしていった。</p>	<p>○ 相談支援専門員が代わったばかりで初対面からのスタートであり、Hさんを知ること、関係性をつくることから始めた。</p> <p>○ 会議開催に当たり、サービス管理責任者、支援者からの聞き取り、状況整理、ヒアリングシートの作成をした。</p> <p>○ 意思決定支援を進めるに当たって、ストレングスの視点を大切にした。</p>

(2) 意思決定支援専門アドバイザーのコメント

意思決定支援の実践には、多様な関係者から寄せられた、本人に関する情報の集積と蓄積が重要です。ガイドラインにも次のような記述があります。

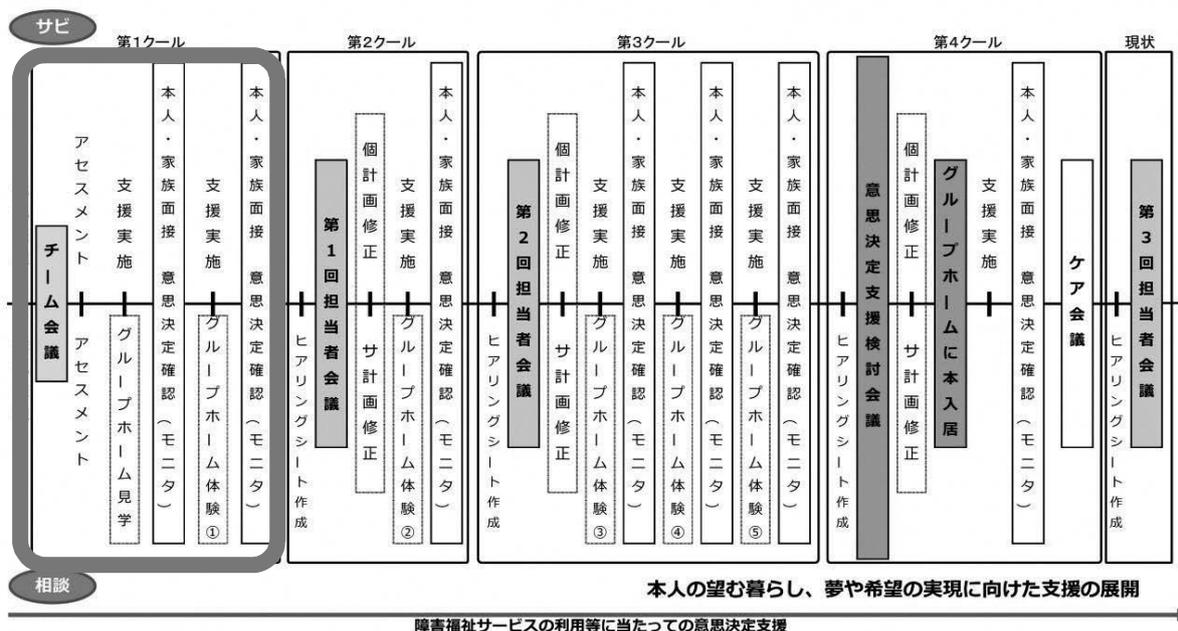
意思決定支援を進めるためには、本人のこれまでの生活環境や生活史、家族関係、人間関係、嗜好等の情報を把握しておくことが必要である。家族も含めた本人のこれまでの生活の全体像を理解することは、本人の意思を推定するための手がかりとなる。また、本人の日常生活における意思表示の方法や表情、感情、行動から読み取れる意思について記録・蓄積し、本人の意思を読み取ったり推定したりする際に根拠を持って行うことが重要である。 <ガイドライン>

津久井やまゆり園利用者に係る意思決定支援で使用されているヒアリングシートでは、障害状況、生活史、生活環境、家族関係、社会関係、ADL、好き・喜び・楽しみ、嫌い・苦手・不快、意思能力・表現方法等の多様な情報が集められ、さらに本人の日々の暮らし等から得られた情報を「手掛かり・ヒアリングエピソード」として記入しています。ヒアリングシートの取りまとめは、相談支援専門員が行いますが、相談支援専門員だけで情報が得られるわけではありません。ガイドラインでは次のようにも述べます。

日頃から本人の生活に関わる事業者の職員が場面に応じて即応的に行う直接支援の全てに意思決定支援の要素が含まれている。

意思決定支援は、本人に関わるあらゆる人々の参画が必要です。関係者一人ひとりが本人の過去・現在・未来に関心を持ち、本人の多彩な自己表現をキャッチし、明確な根拠を持ちながら記録するという、意思決定支援の“当事者”として責任を果たすことが重要です。

第1クール：スタートアップ等



1 本クールの概要

- Hさんに関する情報の共有、意思決定支援の手順や方法等の検討、支援チーム内での役割分担と今後の進め方について検討するため、チーム会議を開催した。
- 支援チームは、Hさんが、やりたいことや気持ちを言葉で伝え、自分で決められる方であると見立て、どのような生活をしたいか、Hさんに直接意向を確認していくこととした。また、Hさんにグループホームに関する情報を提供し、見学を勧めることとした。併せて、家族に意思決定支援について説明し、Hさんの望む暮らしを実現するため、グループホームの見学や体験に加え、母との面会の機会も確保できるよう進めていくこととした。
- グループホームの見学は、Hさんに負担にならないよう配慮しながら実施した。グループホームを見学したところ、Hさんはとても気に入った様子だったが、反面、「あそこには住みたくないの」という発言もあるなど、少し混乱していた。支援チームとしては、この時点では、グループホームに引っ越すということを、Hさんが理解できているか、判断できなかった。
- グループホームの1回目の体験を実施したが、Hさんの「引っ越す」「あっちに住みたい」という言葉をそのまま受け止めてよいかどうか、この時点では判断できなかったため、継続して確認していくこととした。

2 チーム会議

(1) 会議の概要

ア 目的

- ① Hさんに関する情報共有。

- ② 意思決定支援の手順や方法等の検討。
- ③ 支援チーム内での役割分担と今後の進め方の検討。

イ 参加者

相談支援専門員（※チーム責任者）、サービス管理責任者（M施設）、支援者（M施設）、担当ケースワーカー（援護地）、県障害福祉主管課職員

ウ 検討内容

- チームで情報共有をしていく中で、「今後の生活についてのHさんの理解度」「家族（母、兄）の思い」に関する情報が不足していることが分かった。
- これまで毎月面会に来ていた母は、車での長距離移動が難しくなったため、Hさんとの面会ができていない。そのためHさんは、家族に手紙や写真を送ったり電話をかけていた。Hさんが母に面会に行く方法を検討する。
- 県障害福祉主管課職員からの情報：県内の他の社会福祉法人が、Hさんの実家近くに日中支援型グループホーム（以下「Z Xホーム」という。）を新設し、L施設の利用者のために1室を空けている。
- 支援者：Hさんはグループホームで生活する力があると見立てているが、入浴の設備が心配。Hさんの体力からは、新しい体験や距離のある移動は難しいのではないかと。過去に体調を崩して入院することが多かったため、環境が変わることが心配。
- 相談支援専門員：Hさんは言葉でコミュニケーションが取れる方ではあるが、現時点では理解力は不透明。Hさんには、多くの経験が必要。Z Xホームについても、まずは見学し、Hさんの様子を見た方がよい。

エ 今後の取組みと役割分担

- ① 今後の情報収集について
（相談支援専門員、サービス管理責任者）
 - ・ Hさんはやりたいことや気持ちを言葉で伝え、自分で決められる方であるとの見立てを共有した。Hさんがどのような生活をしたいか、直接意向を確認する。
 - ・ 家族（母、兄）の思いを探る。
- ② Hさんと結びつきの深い母親について
（相談支援専門員、サービス管理責任者）
 - ・ 家族に、意思決定支援の取組みについて説明する。
 - ・ 今後、HさんにZ Xホームの見学や体験を勧めることの説明。
 - ・ Z Xホームが自宅の近所なので、見学等にあわせて母との面会を調整する。
- ③ 今後の生活
（相談支援専門員、サービス管理責任者）
 - ・ HさんにZ Xホームに関する情報を提供する。

3 Hさん・家族へのヒアリング

(1) Hさんへのヒアリング

Hさんが集中できるよう、他の人がいない居室でヒアリングを実施した。Hさんに、今後の生活について何うとともに、「グループホームという住居があり、買い物も行けること、なかでもZ Xホームは実家から近く、母とも会いやすいこと」などを言葉で説明した。「一度見学に行きませんか」と聞くと、Hさんは大きく目を見開き、高めのトーンで「行く」と返事をした。その後も、折に触れ「行く」と言っていた。Hさんは、自分で書いた1か月分のカレンダーでスケジュールを管理しており、あまり早く予定を伝えると気持ちがはやり、落ち着かなくなってしまうため、Z Xホームの見学の日程だけは先に伝え、詳細は、後日伝えることにした。

(2) 家族へのヒアリング

ア 兄から

自宅で過していたときは、「発作が多く、自宅では寝てばかり、また、起きているときはよく怒っていた。外出しても大きな声を出すから大変だった。」「今考えると母しか話し相手がいなかったから、フラストレーションが溜まっていたのではないか」とのことだった。養護学校高等部での様子は、「自分も家にあまりいなかったから分からない」とのこと。

イ 母から

電話でHさんの生活史や幼少期の様子を聞き取った。併せて、母に担当者会議の内容を説明し、自宅近くのZ Xホームの見学を勧めたところ、母は大変喜び、快諾した。

【この時点での関係者の所感・取組み】

M施設サービス管理責任者（支援者）	相談支援専門員
<ul style="list-style-type: none">○ Hさんが不調になること（怒り出す）が予想される。早めにスケジュールを伝えた方が良いのかどうか悩んだ。○ Hさんの体調の見守りを続けたい。○ Hさんはとても家族から愛されており、Hさんと母の想いを叶えたい。	<ul style="list-style-type: none">○ グループホームの見学に応じてもらえて安堵した。○ グループホームについて、言葉による説明は必要だが、実際にZ Xホームを見てもらうことが、グループホームを知ってもらうには一番だと考えた。

4 グループホーム見学（チーム会議から1か月後）

(1) 見学時のエピソード

見学には、相談支援専門員、支援者が同行。Hさんには、Z Xホームに見学に行くことを、相談支援専門員から何度も伝えていたが、見学当日は「どこへ行くの」「私、ふりかけが欲しいの」と言っており、買い物に行くと思っていた様子だった。Z Xホームの居室を見たHさんは、「きれい」「ここ私が使っているの」と言った。支援者が「どうですか」と尋ねると「気

に入った」と好意的な感想があった。見学後、Z Xホームの所長から体験利用について、直接説明を受けた。グループホームから帰園する車中、Hさんは疲れた様子で眠っていたが、突然目を覚まし「私、あそこに住みたくないの」と言った。支援者が「どこのことですか」と尋ねると、Hさんは怒ったような口調で「今日、行ったところ」と返答した。相談支援専門員はHさんに「いろいろなところを見て、ゆっくり考えましょう」と伝えた。

【この時点での関係者の所感・取組み】

M施設サービス管理責任者（支援者）	相談支援専門員
<ul style="list-style-type: none"> ○ 新しいものを好む性格から、居室を見学し、部屋を気に入ったのではないか。 ○ 突然目を覚まし、「住みたくない」と発言した点から、グループホームに住むということをHさんが理解するには時間が必要だ。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ Hさんは見学を通して、少し混乱しているのではないか。日を改めて、Hさんの気持ちを確認したい。

(2) 見学後のエピソード

ア サービス管理責任者（支援者）とのやり取り

支援者からHさんに「昨日行ったグループホームきれいでしたね」と声をかけると、Hさんは笑顔で「私、あそこに行ってみるよ」と答えた。「気に入ったのですか」と尋ねると、「うん、きれいだったし」と答えた。母に見学の様子を伝えると、「早く会いたいわ」「頑張らなくちゃ」と返答があった。

イ 相談支援専門員とのやり取り

見学後のモニタリング面接で、Hさんは自分が欲しい物を次々と話し出すなど、話を最後まで聞かず、気持ちが先走っている様子もあったが、「お母さん目が見えないの」と涙ぐんで話したり、「早く引越したい」「お母さんに会いたい」と思いを語った。「M施設はどうですか」と尋ねると、Hさんは「楽しくない」とのこと。母は、「本人には申し訳ないと思っている。元気で過ごしてほしい。住まいの場は自宅から近いZ Xホームに住めるとよい。体験を進めてほしい。」との意向を示した。

ウ 施設内での様子

Hさんは同じ寮の利用者に、「私、引っ越すんだよ」と話していた。その利用者から「どこに行くの」と聞かれ、「私はAB市に引っ越すの。お母さんの近くで暮らすんだよ。」と明るい声で話した。支援者にも「あのね、私、引っ越すよ」との話があった。自身のベッド周辺の荷物を指さしながら、「この荷物持ってくからね」と話した。翌日も、「私はAB市に引っ越す」と支援者に話していた。支援者から「Z Xホームでは自分でできることは自分でするのですよ」と話をすると、首をうなだれていた。日中活動の際には、「男の子しかいないから嫌」（実際には女性の利用者も利用している）、「料理をさせられるから嫌」などのマイナスな言葉が聞かれるなど、混乱している様子があった。

【この時点での関係者の所感・取組み】

M施設サービス管理責任者（支援者）	相談支援専門員
<ul style="list-style-type: none"> ○ ZXホーム見学の印象を聞く。ZXホームでの体験をどのようにHさんが感じているか探る。 ○ Hさんは、引越しの気持ちだけが先行し、気分が高揚していると感じた。 ○ 「私だけがこんなに見学している」と誇らしげに振る舞う姿から、他の利用者より優位に立つために早く体験を進めたいのではないかと感じた。 ○ 母には、ZXホームでの生活のことや見学時のHさんの様子を伝えた。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ Hさんは、ZXホームの体験を楽しみにしていると感じた。一方で、あまりHさんに負担をかけずに体験を進めていきたい。 ○ Hさんに「引越す」ということが、具体的にどういうことなのかをしっかりと説明し、理解してもらう必要性を感じた。 ○ 母とのやり取りを通して、母が「Hさんの近くにいたい」「Hさんに会いたい」という思いがあることを再確認した。

5 グループホーム体験1回目：6泊7日（見学から1か月後）

(1) 体験前の状況

体験に先立ち、Hさんと面会するために、ZXホーム所長と日中を過ごすN生活介護事業所（以下「N事業所」という。）の担当者にM施設に来園してもらい、Hさんの日頃の様子や生活環境、支援上での注意点等、ZXホームの体験に向けて必要な情報を交換した。Hさんは「この前、会った人だ。これ、宝物なの」と、見学時にもらった名刺とZXホームのパンフレットを見せ、嬉しそうにしていた。

Hさんは体験の数日前に体調を崩し通院したがほどなく回復。医師から体験を許可されたHさんは、「グループホームに行ける」「ばんざーい」と両手を上げて喜んだ。

【この時点での関係者の所感・取組み】

M施設サービス管理責任者（支援者）	相談支援専門員
<ul style="list-style-type: none"> ○ 環境の変化で体調を崩さないか心配していたが、実際に起きてしまった。やはりグループホームの体験や移行は難しいのではないか。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 体験直前に体調を崩していたので、このまま体験を実施できるか心配だった。

(2) グループホーム体験時のエピソード

ア 出発前から到着後の様子

相談支援専門員と支援者が同行。出発前に体験することは伝えていたが、ZXホームへ向かう車中、Hさんから「どこ行くの」と質問があった。ZXホームでは母と兄が待っていて、久しぶりの再会に母と兄は喜んでいて、Hさんは「おにぎりが欲しい」など、欲しい物を次々と母や兄に伝えていた。家族が帰るときは、「じゃーね」と淡々と saying していた。

イ 体験中の様子

日中はN事業所に通所し、ひまわりの種の選別、マッサージ、塗り絵、買い物、散歩などを行った。また、N事業所に通所するHさんの知人と口論になったり、暴言を吐くなど、落ち着かないこともあったが、慣れてくると「散歩に行きたい」「ひまわりやりたい」「マッサージやりたい」と意欲的に活動を楽しんだ。ZXホームでは、Hさんからの乱暴な言葉使いや、支援への拒否があったため、ほぼマンツーマンの支援を要した。

ウ 体験終了時の様子

帰りの車中、相談支援専門員が感想を聞くと、Hさんは「楽しかった」「園のお祭りが10月だから11月にまた泊まりたい」「マッサージをしてもらった」と話した。「園とグループホームとどちらがいいですか」「ずっとグループホームにいたいですか」などの質問には、返答がなかった。

【この時点での関係者の所感・取組み】

M施設サービス管理責任者（支援者）	相談支援専門員
○ Hさんの希望が叶ってとても喜んでいる様子であったが、反面、次々と希望がエスカレートしていかないか懸念していた。	○ ZXホームからはHさんの支援が大変だったと聞いていたが、Hさんからは、楽しかった話しか聞かれなかった。このまま2回目の体験につなげたいと感じた。

(3) 体験後のHさんのエピソード

体験の翌日、支援者に「ZXホームにいつ戻れるの」「友達ができた」等の話があった。「先方の都合もあるからすぐには返事ができない」と伝えると、Hさんは「向こうの職員は優しくかった。向こうの職員だったらすぐやってくれたのに」などと顔をしかめ、支援者の顔を叩いた。しばらくして、Hさんは「ごめんなさい」「あっちがいいんだもん」と謝った。数日後、Hさんは相談支援専門員に「11月にお泊りしたいの」と話した。「ZXホームでずっと住むのはどうですか」と質問すると、「あっちに住みたい」と返答があった。相談支援専門員は、11月に体験できるかどうかをZXホームに確認することを約束した。

【この時点での関係者の所感・取組み】

M施設サービス管理責任者（支援者）	相談支援専門員
○ Hさんは、「住む」という意味を理解されているのか。Hさんに聞き取りをする必要性を感じた。	○ Hさんの「あっちに住みたい」という言葉が、本当に引っ越すことを意味しているのか、単に遊びに行くと思っているのかは、確認していく必要がある。 ○ 家族もHさんも互いに「会いたい」という気持ちがあり、ZXホームの体験を続けていきたい。

6 グループホーム体験2回目に向けての調整

(1) サービス管理責任者（支援者）と相談支援専門員との打合せ

支援者と相談支援専門員には、1つのグループホームの体験をただで移り行と考えてよいかという心配があり、支援者が以前に住んでいたL施設について確認することとした。当時、生活していた寮の名前を出せば、施設での暮らしを思い出すかもしれないと考え、「○○ホームはどうか」と尋ねてみたが、Hさんは忘れてしまっていた様子だった。しかし、Hさんは、誰に何の折り紙をプレゼントしたかを、よく覚えていた。

(2) 相談支援専門員によるヒアリング

ア Hさんより

「11月に泊まりに行きたいの。あっちの人にまた来てねって言われているの」と話した。ZXホームの所長から再度の体験も可能と言われたことを伝えると、とても喜んだ。

イ 母より

2回目の体験の実施、Hさんの入居意向がある場合には入居を進めることを確認。「本人が希望するならば是非お願いします。私も嬉しい。兄も私と同じ気持ちのはず」と話した。

ウ 兄より

「本人が希望するならば」と2回目の体験は承諾したが、「入居となると話は別。小規模のメリットとデメリットがある。職員体制、健康への配慮が心配。グループホームのこともよく分からない。通所先のことも気になる。入居については保留としたい」と話した。相談支援専門員は兄に、「慎重に対応させていただきます」と伝えた。

エ ZXホームより

所長から、介護度が高いHさんを受入れる場合に必要な、職員体制の確保や浴室リフトの整備などを検討しているとの話があった。

【相談支援専門員の所感】

- ZXホームの運営者側が、介護度の高いHさんを受け入れるために、職員体制や浴室リフトを、前向きに検討してくれていることに感謝と頼もしさを感じた。
- 兄はグループホームについて、障害者支援施設とは違う支援体制や医療面に不安を感じている様子であったが、兄にもHさんを中心にしたチームメンバーの一員として、Hさんをより後押ししてもらえよう進めていきたいと考えた。

7 本クールのまとめ

(1) 関係者が意識した役割・配慮点等

M施設サービス管理責任者（支援者）	相談支援専門員
<ul style="list-style-type: none"> ○ Hさんへの話しかけ方、Hさんの反応、支援者の場面解釈等も記録した。Hさんは話ができるので、質問方法を工夫し、Hさんの真意を確認するようにした。 ○ グループホームを体験した後、Hさんの心がどう揺れ動くかがポイントだった。 ○ カレンダーを利用してHさんにスケジュールを提示した。 ○ Hさんは新しい物が好きな方で、Z Xホームについても一目で気に入った様子だった。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ Hさんの負担が少なくなるように、Z Xホームの見学・体験を調整する。 ① 共同生活援助、身体介護の支給にあたってのサービス等利用計画の作成 ② Z XホームへHさんの状況について情報提供（支援者等に依頼） ○ Hさんへの情報提供とHさんのZ Xホームに対する思いを確認する。また、家族の意向を確認する。 ○ Z Xホーム側の受け入れ状況を確認する。

(2) 意思決定支援専門アドバイザーのコメント

意思決定支援は、チームによって担われます。チームが有効に機能していくためには、本クールでの「チーム会議」のようなチームビルディングの機会が必要です。チームを構成するメンバーの専門性や各人の背景は多様ですが、情報が共有され、支援の方向性等が話し合われる中で、チームメンバーの“波長合わせ”が進んでいきます。

本クールでは、Hさんにとって資すると思われるグループホームに関する情報が寄せられ見学や体験に結びついていきます。ガイドラインでは、「サービスの利用の選択については、体験利用を活用し経験に基づいて選択ができる方法の活用など経験の有無によっても影響されることが考えられる」(p.4)と記されています。一般に、障害のある人々は、その障害ゆえに、日々の暮らしや人生に関わる「選択肢」が少ない状況に置かれがちです。

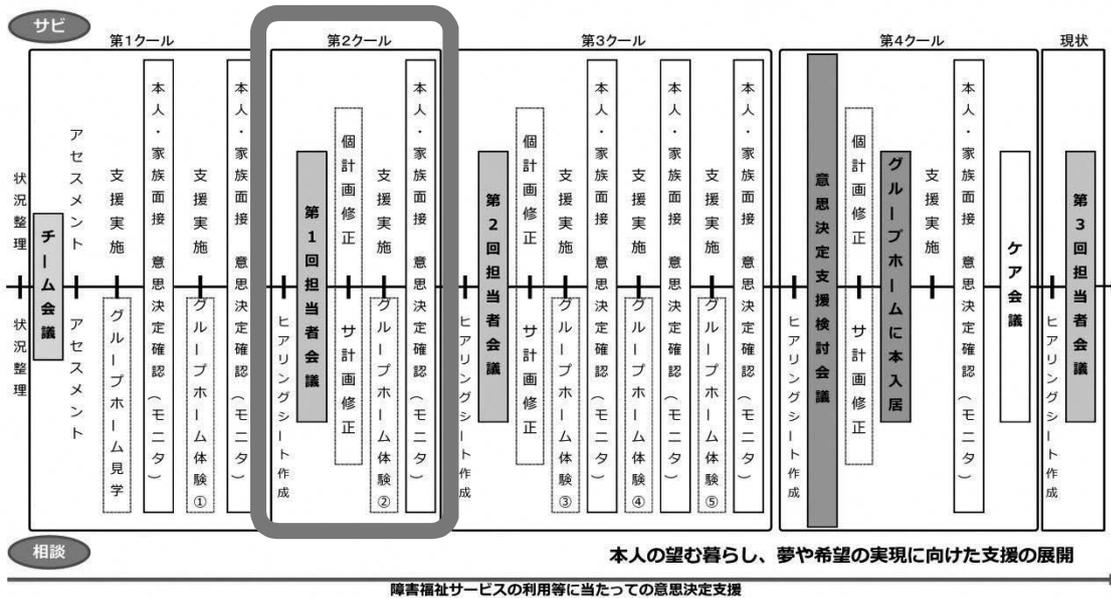
情報提供から見学・体験にダイレクトにつながった本ケースでは、「拙速ではないか」という印象を持つ方もいるかもしれませんが、Hさんへの丁寧な説明を踏まえ、タイミングを逃さず、意思決定支援に必要な見学・体験に結びついたものと言えるでしょう。

本クールでは、Hさんへの説明・ヒアリングが行われています。ガイドラインには、以下のような記述があります。

意思決定支援を行うにあたっては、意思決定に必要だと考えられる情報を本人が十分理解し、保持し、比較し、実際の決定に活用できるよう配慮をもって説明し、決定したことの結果起こり得ること等を含めた情報を可能な限り本人が理解できるよう、意思疎通における合理的配慮を行うことが重要である。

意思疎通に配慮し、「本人の自己決定にとって必要な情報の説明は、本人が理解できるよう工夫して行うこと」(ガイドライン、p.4)は、意思決定支援の大切なステップです。

第2クール：グループホーム体験に向けて



1 本クールの概要

- 第1クールでの支援の進捗状況の共有やここまでの支援の結果から見てきたHさんの意思や望む生活について意見交換した上で、この先のHさんの支援の方向性を検討するため、担当者会議を開催した。担当者会議では、Hさんは情緒の波が激しく、Hさんの本当の気持ちが分かりにくいこと、兄はHさんのグループホームへの入居に慎重であること、Hさんが体調を崩した場合の支援体制に不安があること、たった一か所の体験で住まいの場を選択してよいのか、そうは言ってもHさんの家族交流を考えると、良いチャンスなのではないか、等について話し合われた。
- Hさんにヒアリングをしたところ、グループホームに引越したい気持ちがあるが、引越しても戻ってくる、とも言っていた。相談支援専門員も支援者も、HさんはZ Xホームに移り住むことの意味を十分に理解していないのではないかと、Z Xホームの支援者に頼まれたから行かないといけないと思っているのではないかと、などHさんの本心が分からず、不安を感じた。兄へのヒアリングから、兄は、グループホームでの暮らしにメリットとデメリットを感じていることが分かった。
- 2回目のZ Xホームの体験を実施した。1回目に比べ、Hさんは落ち着いていた。

2 担当者会議（1回目）

(1) 会議の概要（開催時期：前回会議から約2か月半後）

ア 目的

- ① チーム会議で出された必達目標の進捗状況を共有。
- ② Hさんの様子、反応、言葉等や家族へヒアリングした内容等の共有。

- ③ ここまでの支援結果からHさんの意思（望む生活）について意見交換。
- ④ 今後のHさんの支援の方向性を検討。

イ 参加者

相談支援専門員（※チーム責任者）、サービス管理責任者（M施設）、支援者（M施設）、担当ケースワーカー（援護地）、県障害福祉主管課職員

ウ 検討内容

- ① Hさんの意向
 - ・ Hさんは、その時々で気持ちが変わるため、異なる場面で色々な人が確認する。
 - ・ 1回のグループホーム体験だけで決めてしまうのではなく、一定期間以上の体験を複数回繰り返す必要がある。1か所の体験では住まいの場の選択肢としては少ない。
- ② 支援上の配慮
 - ・ てんかん発作や肺炎等、医療面の配慮が必要である。
 - ・ 車椅子を利用しているHさんのADLや障害特性などから、日中支援型のグループホームが候補となる。ただし、現時点では自宅近くには体験先の他に日中支援型グループホームがない。
- ③ 家族との関係
 - ・ 母はHさんのZ Xホーム入居について賛成しているが、兄は慎重である。
- ④ セーフティネット
 - ・ グループホーム入居後、何らかの理由でグループホームでの生活が難しくなった場合の対応が必要。

エ 今後の取組みと役割分担

- ① 1か月程度のZ Xホームの体験に向けた調整を進める。
（相談支援専門員）
 - サービス等利用計画の修正（現行6日の体験利用を増やす）。
 - 2回目のZ Xホーム体験の調整。
 - Hさんへの説明。
- ② 前回のZ Xホーム体験の様子、意思尊重などについて、家族に説明する。
（相談支援専門員）
 - 母と兄への説明。
（サービス管理責任者・支援者）
 - Hさんの思いを確認し、個別支援計画にグループホームの体験等について反映させる。
- ③ HさんがZ Xホームを体験している最中にZ Xホームで担当者会議を開催し、Hさんからヒアリングを行う。
（相談支援専門員）
 - 次回の担当者会議に、Z Xホーム支援者の参加要請と会場の手配を行う。

3 Hさんへの説明、ヒアリング

(1) サービス管理責任者（支援者）によるヒアリング

- Hさんは「Z Xホームに早く引越したい」と話し、支援者が「引っ越すということは、ここには帰ってこないということは分かっていますか」と聞くと、Hさんは「えー」と言い、「帰ってきたいよ」「あっちに行ってもここに帰ってくるよ。でも引っ越す」と話す。また、「Z Xホームから電話がない」と気にしており、支援者は「いろいろ準備をしているのでしょ。もう少し待ってみましょう。」と答えた。
- 支援者が体験したZ Xホーム以外の見学希望を聞くと、Hさんは「見に行きたい」と返答した。そこは母と兄の近くにはないと伝えると、Hさんは下を向いて「お母さんたちの近くがいい」と答えた。なぜ母や兄の近くで暮らしたいかを尋ねると、「お兄ちゃんからお金をもらわなきゃいけないから」と答えたので、必要なお金は預かっていることを伝えたが、「お兄ちゃんからもらうんだもん」と話した。

(2) 相談支援専門員によるヒアリング

- Hさんは「11月じゃなくて10月の施設のお祭りが終わったらZ Xホームに行く」と繰り返した。どの位泊まりたいか聞くと「長く」と答えた。「ずっとZ Xホームにいるのか」と尋ねると、「L施設に戻る」と答え、「お母さんに会いたいの」と話した。
- 次の体験が12月となることを伝えると、Hさんは「えー」と不満そうに声を上げた。Hさんは「日にちを紙に書いて」と言った。日程を書きながら、「Z Xホームの人になるのと、M施設にいるのとどちらがよいですか」と聞くと、Hさんは「Z Xホーム。Z Xホームの人にまた来てと頼まれているの」と話した。再度、「ずっとZ Xホームに住みますか」と聞くと、「施設にいたいの」「来てねって言われているの」との返答があり、Z Xホーム入居を悩む様子があった。Hさんには「今、決めなくてもよいけれど、よく考えてほしい」と声をかけた。
- 体験の日が近づくにつれ、普段気にしないようなことに声を荒げ、怒鳴り散らし、罵声を飛ばすことがあった。また、「私は、Z Xホームに行くんだからね」と他の利用者に自慢するような様子もあった。

【この時点での関係者の所感・取組み】

M施設サービス管理責任者（支援者）	相談支援専門員
<ul style="list-style-type: none">○ Hさんの気持ちを聞くと、Z Xホームへの引越しを希望する発言が多い。なぜ早くZ Xホームへ行きたいのだろうか。○ 引越しはしたい気持ちがあるが、園に心残りがあるようだ。引越しても園に戻ってくるとの発言がある。Z Xホームに移り住むことの意味を理解できているのか。	<ul style="list-style-type: none">○ 本当にHさんがZ Xホームに行きたいのか、頼まれたから行かないといけないと思っているのか本心を探りたい。○ Hさんにとって、Z Xホームへの引越しは、楽しみなことでもあるが、不安や緊張もあって、様々な思いが行動に現れている。揺れ動き、迷っている様子がある。

4 家族への説明、ヒアリング

(1) サービス管理責任者（支援者）のヒアリング

- 母には、Z Xホーム体験の見通しを伝えた。兄にもZ Xホーム体験時の様子を伝え、今の気持ちを聞いた。兄は、「自宅から近くすぐにHさんの顔を見られることや、日中活動先に近いことは良い」と語るが、グループホームにおける医療体制への不安や、「Hさん自身はM施設に戻れると思っているのだろう」などと語った。

(2) 相談支援専門員のヒアリング

- 12月に2回目の体験を実施することについて、母から快諾を得た。

【この時点での関係者の所感・取組み】

M施設サービス管理責任者（支援者）	相談支援専門員
○ 家族は、医療体制の不安を取り除ければ、Z Xホーム入居を賛成するのか。	○ 母の喜ぶ声を聞き、Z Xホーム体験がうまくいくと良いと思った。同時に兄の心配が払拭できるか不安を感じた。

5 グループホーム体験2回目：5泊6日（見学から4か月後）

(1) グループホーム体験時のエピソード

県の補助金を活用しZ Xホームの浴室にリフターを設置したことで入浴できた。Z Xホームにも慣れてきたようで、前回よりも穏やかに生活ができていた。しかし、暴言や拒否的な行動も見られ、対応に苦慮した。

【この時点での関係者の所感・取組み】

M施設サービス管理責任者（支援者）	相談支援専門員
○ 1回目の体験時よりも入浴や生活全般がスムーズになったと聞き、安心した。 ○ 暴言、拒否的な行動や身体状況を含め、Z Xホームの支援者との引継ぎが必要だと感じた。	○ Z Xホーム体験中の暴言や拒否的な行動に対して、Z Xホーム担当者から対応を前向きに検討する旨の話があり心強く思った。 ○ Hさん自身からは楽しい話ばかり聞かれ、体験を進めていきたいと思った。 ○ 家族に理解をしてもらえるか不安。

6 本クールのまとめ

(1) 関係者が意識した役割・配慮点等

M施設サービス管理責任者（支援者）	相談支援専門員
<p>○ Hさんは言葉を多く知っている方だが、言葉とHさんの気持ちが一致しているのかどうかに配慮した。</p>	<p>○ Hさんの意向の確認において、Hさんの発する言葉を、言葉どおり受け取ってよいかを探っていく必要を感じた。</p> <p>○ ZXホームの体験を調整する。また、サービス等利用計画を変更する。</p> <p>○ ZXホーム体験中のHさんの様子を確認する。</p> <p>○ ZXホームの受け入れ状況を確認する。</p> <p>○ 家族の意向を確認する。</p>

(2) 意思決定支援専門アドバイザーのコメント

本クールでは、前クールで行われたグループホームの見学・体験の結果をもとに、さらに体験を続けていくこととなりました。ガイドラインでは、意思決定支援が必要な場面の一つとして、「社会生活の場面」について次のように説明しています。

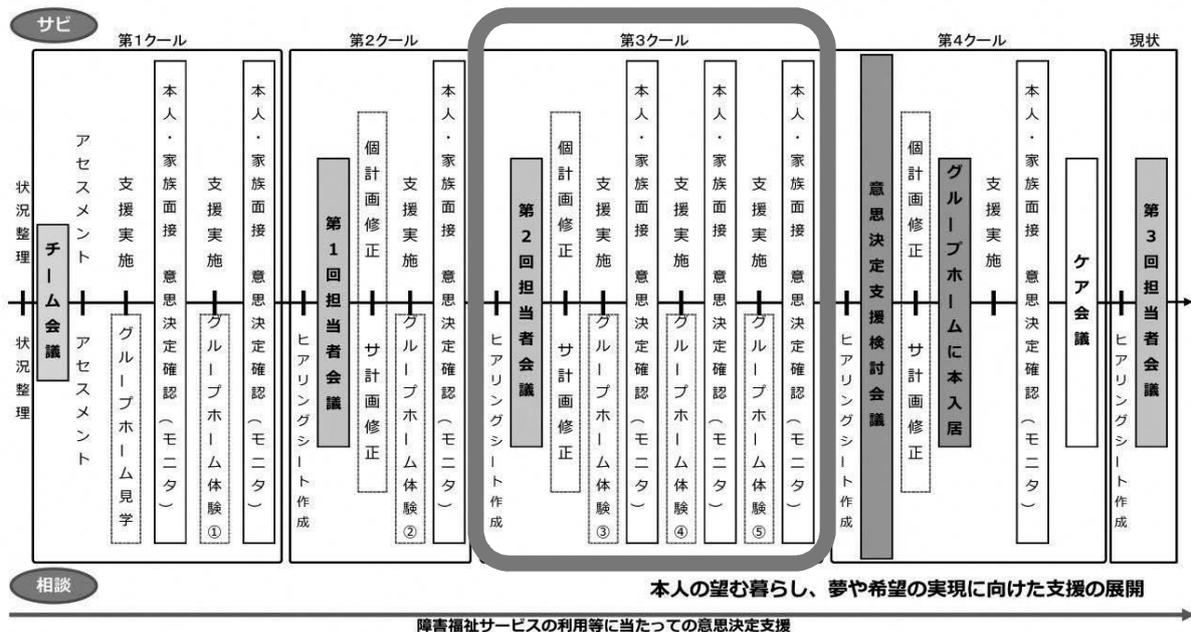
障害者総合支援法の基本理念には、全ての障害者がどこで誰と生活するかについての選択の機会が確保され、地域社会において他の人々と共生することを妨げられない旨が定められていることに鑑みると、自宅からグループホームや入所施設等に住まいの場を移す場面や、入所施設から地域移行してグループホームに住まいを替えたり、グループホームの生活から一人暮らしを選ぶ場面等が、意思決定支援の重要な場面として考えられる。
<ガイドライン>

住まいの場の選択という大きな意思決定を行う際には、慎重な判断が求められます。本クールでも、Hさんが体験を積み重ねる中で、どのような暮らしを望むのかを自ら決定できるよう配慮しています。その背景には、Hさんのグループホームに対する前向きな発言と、体験時の暴言や拒否的な行動という、相反する状況が挙げられます。

利用者の前向きな発言や態度等に接すると支援者は喜びを感じますが、他方で、表出された本人の思いが、本当に真意なのか迷いが生ずることもあります。Hさんは明確な意思表示をする方ですが、発せられる言葉と気持ちは合致しているのか、相談支援専門員やサービス管理責任者は慎重に見極めることとしています。

ガイドラインには、「日常生活における場面で意思決定支援を継続的に行うことにより、意思が尊重された生活体験を積み重ねることになり、本人が自らの意思を他者に伝えようとする意欲を育てることにつながる。」(p.3)と説明されています。グループホームへの前向きな関心を抱くHさんにとって、自らの思いが肯定され、継続的な体験の機会を通じて本人のエンパワメントにつながっていくこととなるでしょう。

第3クール：グループホームへの本入居に向けた取り組み



1 本クールの概要

- 支援の進捗状況、Z Xホーム体験と今後の生活についてHさんの意思確認結果等を共有・意見交換し、今後のHさんの支援の方向性を検討するため、2回目の担当者会議を開催。会議は、Hさんと家族からも話を伺うため、2回目のZ Xホーム体験中に体験先で開催。会議の場で、HさんからZ Xホームへの入居意思を確認した。Z Xホーム入居に慎重であった家族の理解を得ることもできた。他方で、2回の体験で方向性を決定して良いのか、という不安があったため、さらに体験を継続し、Hさんの意向を確認していくこととした。
- 2回目の体験以降、支援者や日中活動の支援者等から、Z Xホームへの引越しについて迷っているHさんの様子について報告があった。Z Xホームへの入居が具体化したことで、Hさんの不安な気持ちが、一層強くなってきていた。
- 3回目の体験では、「楽しかった」とか、「また泊まりたい」という気持ちが聞かれる反面、Z Xホームにずっと住むかどうかの質問に対しては、Hさんから返答がなかったり、今まで一緒に暮らしてきた仲間と離れたくない等、寂しさを口にするなど、転居の意味をHさんが理解し始めていた。
- 4回目の体験で、HさんのZ Xホームへの入居の意思はさらに強くなった。他方、「引越したらM施設の人ではなくZ Xホームの人になる」ことをHさんに話すと、何も答えなかったり、知らぬ素振りをしたり、寂しさを口にしたりと、Hさんの心の中で新しい生活への葛藤があることが窺えた。
- 5回目の体験から、本入居につながることとなった。寮のお別れ会では、Hさんは涙を流しながら「頑張ってきます」と皆に挨拶し、新たな生活への決心をした。

2 担当者会議（2回目）

(1) 会議の概要（開催時期：前回会議から約2か月半後、Z Xホーム体験中）

ア 目的

- ① 1回目の担当者会議後の必達目標の進捗状況を共有する。
- ② Z Xホームの体験の感想と今後の生活について、Hさんから直接意思を確認する。
- ③ ここまでの支援結果からHさんの意思（望む生活）について意見交換。
- ④ 今後のHさんの支援の方向性の検討。

イ 参加者

Hさん、母、兄、相談支援専門員（※チーム責任者）、サービス管理責任者（M施設）、支援者（M施設）、担当ケースワーカー（援護地）、Z Xホームの所長（サービス管理責任者）、N事業所の施設長、県障害福祉主管課職員

ウ 検討内容

- Hさんの意向について ※次頁の逐語記録のとおり
- Z Xホームでの生活について
 - ・ Z Xホーム所長から、次の体験はもう少し長期にし、その延長でZ Xホームへ移行してはどうかと提案があった。
 - ・ 兄も柔軟に考え、段階を踏んでいくことを望まれた。一番の心配は、Z Xホームでの診療体制、医療体制。
 - ・ N事業所の施設長から、訪問診療や通院介助等の対応が可能であること、地域の様々な診療所から選択でき、通所先での看護師配置について説明があった。

エ 今後の取組みと役割分担

- ① Hさんの意思を確認する。
(相談支援専門員・サービス管理責任者)
Hさんに寄り添いつつ、意思を繰り返し確認する。
- ② Z Xホームの体験の調整。
(相談支援専門員)
次回の体験に向けたサービスの調整。
(サービス管理責任者)
次回の体験に向けた日程調整とHさんの支援の引継ぎ準備。
- ③ Z XホームにHさんを受け入れるに際して、医療体制を整備する。
(相談支援専門員)
体験先のZ Xホームとの調整。次回は、長期の体験中に体験先で検討会議（最終的なHさんの意思を確認する）の開催を調整。
(サービス管理責任者)
Z Xホームへの移行に向けた支援を個別支援計画に盛り込む。

■ 逐語記録：Hさんの思い・家族の思い

相談支援専門員：	「グループホームの生活を楽しんでいますか」
Hさん	： 「楽しんでいるよ」
相談支援専門員：	「グループホームでお兄さんとお母さんに会えたのは今回が初めてですか」
Hさん	： 「初めて」
生活介護施設長：	「塗り絵とひまわりの種の選別や、刺繍の下絵を描いているね」
Hさん	： 「ひまわりやりたい」
相談支援専門員：	「今、楽しいですか」
Hさん	： 「楽しい」
相談支援専門員：	「ここに住みたいですか」
Hさん	： 「うん」
相談支援専門員：	「ずっとずっと住みたいですか」
Hさん	： 「うん。住みたい」
相談支援専門員：	「施設で聞いたときは、悩んでいる様子もあったけど、どうかな」
Hさん	： 「住みたい。うん」
相談支援専門員：	「寂しくなったりしませんか」
Hさん	： 「うん。眼医者、2月15日に予約をしていた」
相談支援専門員：	「ご家族としてはどのようにお考えですか」
母	： 「本人がここいたいとしっかり言っているので、いいと思う」
相談支援専門員：	「お兄さんはどうですか」
兄	： 「施設に戻らないことでいいの、本当にいいの」
Hさん	： 「いいよ」
兄	： 「私も、本人の意思がすべてだと思う」
相談支援専門員：	「施設に戻れなくなるという話をしたときは、嫌と言っていましたが…」
Hさん	： 「(兄に対して) 靴下買って」
相談支援専門員：	「寂しくなったら施設に遊びにくるのはどうかな」
Hさん	： 「アイ、ドント、ノー」
相談支援専門員：	「どういう意味ですか。ここに居たいということでよいのでしょうか」
Hさん	： 「イエス」
相談支援専門員：	「ずっとここで生活するということですか」
Hさん	： 「はい」
相談支援専門員：	「次は、お医者さんを見つけてから、長い期間のお泊りをしましょうか」
Hさん	： 「嫌だ。あと1日泊まりたいの」
相談支援専門員：	「今日は帰りませんよ。何回か泊まりに来てから、ここでの生活が始まることでよいですか」
Hさん	： 「しゅん…」
相談支援専門員：	「次のお泊りは何月がいいですか」
Hさん	： 「考えておく。考えておいて。次は1月5日に泊まりたい」

【この時点での関係者の所感・取組み】

M施設サービス管理責任者（支援者）	相談支援専門員
<ul style="list-style-type: none"> ○ 楽しい体験が続いたことで、HさんはZ Xホームに住みたいと思っているのかもしれない。 ○ たくさんの人に囲まれた会議で、Hさんは少し照れている。落ち着いた環境で、再度、Hさんの気持ちを確認したい。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ HさんのZ Xホーム入居意思を確認し、心配していた家族の理解も得られ安心した。 ○ 2回のZ Xホームの体験のみで方向性を決めて良いか不安。4月のZ Xホーム本入居の可能性を探るため、さらに体験を行い、Hさんの意向を確認したい。

3 Hさんへの説明、ヒアリング

【ヒアリング】

- 支援者が、居室のHさんに「少し話をしても良いですか」と訪問。「今いるここはなんという名前の所か分かりますか。この前、泊まりにいった所はどこですか」と尋ねると、Hさんは「分かんない」とつぶやく。「ここは施設で、グループホームはZ Xいう所です」と伝え、「この前泊まったところに住むことを、家族が賛成してくれましたね」と話すと、Hさんは目を丸くして「えー」と答えた。「Z Xホームに住むと、今一緒にいる仲間にさよならを言うことになりましたが大丈夫ですか」と尋ねると、しばらく考えながら小さな声で「うん」と答えた。「うん」と言った直後「ねえ、これやって」と全く違う話をし始めた。また、日中活動の支援者から「Z Xホームに引越しますか」と質問すると、Hさんは「引越さない。分からない。」と迷っているような答えをしていた。
- 3回目の体験が近づく中、支援者はHさんにM施設の場所とグループホームの場所について質問した。

■ 逐語記録：Hさんの場所に関する認識

支援者	：	「今いるこの場所はなんでしたか」
Hさん	：	「M施設」
支援者	：	「それではグループホームの場所は」
Hさん	：	「Z X」
支援者	：	「M施設とZ Xホームのどちらで暮らしたいですか」
Hさん	：	「Z Xホーム」
支援者	：	「なぜZ Xホームなのですか」
Hさん	：	「一人だから。」
支援者	：	「お部屋は一人の部屋が良いのですか」
Hさん	：	「うん。」
支援者	：	「次の体験の時、どのようなお仕事がしたいですか」
Hさん	：	「うーん。ひまわり」
支援者	：	「ひまわりは時期ではないので、違う作業かもしれませんね。」
Hさん	：	「どうかな。」

【この時点での関係者の所感・取組み】

M施設サービス管理責任者（支援者）	相談支援専門員
<ul style="list-style-type: none"> ○ M施設とZ Xホームの区別はついている。 ○ HさんがM施設とZ Xホームのどちらに住みたいのか、その理由とともにHさんの意思を確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ Z Xホーム入居が体験を踏まえて具体化したことで、Hさんの不安が強くなってきた。 ○ Hさんが決断できるように、より一層Hさんに寄り添っていく必要がある。

4 グループホーム体験3回目：6泊7日（見学から5か月後）

(1) グループホーム体験中のエピソード

Hさんの希望で、1日おきに入浴した。夜間は熟睡できず3時間程の睡眠であった。また1時間おきにトイレの訴えがあった。昼間は居眠りすることがあった。日中は買い物などして楽しく過ごしたが、支援者との関りが多かった。Z Xホームの利用者は、他者との交流よりも個々の趣味を楽しむ方が多く、他の利用者との関りは少なかった。テレビを見ながら大きな声を出しているHさんが、他の利用者に注意される場面があった。

通所先のN事業所では、関係がよくない利用者とのトラブルがあり、Hさんが「行きたくない」と言うことがあった。通所先では、塗り絵、折り紙等をして過ごしていた。もちつきにも参加し、その時の写真を大切に持っている。

(2) 体験後のHさんのエピソード

相談支援専門員が感想を聞くと、「楽しい」「また泊まりたい」と答えた。母と兄が面会に来たことも話した。翌月にも泊まれることに、Hさんは「やったー」と喜んでた。

再度、体験の感想を聞くと「楽しかった」と答えた。「何が1番楽しかったですか」と聞くと、「全部」と答えた。「4月からはずっとZ Xホームでよいですか」と、何度も確認してみたが反応は返ってこなかった。

体験から戻ったHさんは、寮の支援者に「楽しかった」「また行きたい」と感想を話した。反面、就床までの間「テレビが見たい」「この友達と離れたくない」「どうしたらいいの」など気持ちが揺れている様子があった。

【この時点での関係者の所感・取組み】

M施設サービス管理責任者（支援者）	相談支援専門員
<ul style="list-style-type: none"> ○ 楽しいことだけでなく、トラブルもあったことで、Hさんの心が揺れているのかもしれない。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ Z Xホーム入居にHさんが返事をしないのは、Z Xホームに入居したらM施設に戻れないことを理解し、寂しい気持ちを抱いていると感じた。 ○ Hさんの選択を見届けたい。

5 グループホーム体験4回目：7泊8日（見学から6か月後）

(1) 体験中のエピソード

体験中、あまり眠れない日もあった。買い物は支援者と相談し、土日に行くことにした。通所先では、折り紙、マッサージの他に刺繍を行い、N事業所からZXホームへ戻ってから、「刺繍をした」と嬉しそうに支援者に話していた。

(2) 体験後のエピソード

支援者の「HさんはZXホームの人になったら何をしたいですか」の問いかけに、「買い物したい」と答えた。「みんなに引越しすることを言わないといけませんね」と話すと、「分かった」と答えた。相談支援専門員の「引越したらM施設の人ではなく、ZXホームの人ですね」などの言葉に、Hさんは何も答えなかったり、「えー」と知らなかったような反応や、寂しさを口にする場面もあった。「次の体験をしたらそのままZXホームへ入居することでいいですか」と確認すると、「分かった」と答え、「来月の会議で気持ちを聞かせてほしい」と伝えた。

寮でのHさんのお別れ会では仲間から感謝状をもらい、「ZXホームで頑張ります」と語った。「Hさんありがとう」と書かれたケーキを囲み、他の利用者や支援者と写真を撮った。

【この時点での関係者の所感・取組み】

M施設サービス管理責任者（支援者）	相談支援専門員
<ul style="list-style-type: none">○ Hさんは、自分が主役ということを楽しんでいる様子であるが、ZXホームに移行することの理解については不安も残る。○ ZXホームと連携する必要がある。	<ul style="list-style-type: none">○ グループホームの理解に不安を感じていたが、体験4回目頃からHさんが寂しさを口にするなど、グループホームに住む意味を理解した。○ Hさんの選択を見届けようと考えた。

6 グループホーム体験5回目：18泊19日（見学から7か月後）

(1) 体験前のエピソード

出発前、寮の仲間にも声をかけられ、Hさんは涙を流し「頑張ってきます」と挨拶をした。支援者にも見送られ、握手を交わし車に乗り込んだ。ZXホーム到着後、居室で支援者と一緒に荷物を整理し、「お寿司を食べに行こう」と話した。

【この時点での関係者の所感・取組み】

M施設サービス管理責任者（支援者）	相談支援専門員
<ul style="list-style-type: none">○ 一定期間ZXホームで暮らし、実感が湧いたところでHさんの声を聞きたい。○ ZXホームと連携しHさんの様子を見る。	<ul style="list-style-type: none">○ 寮でのお別れ会や出発前のHさんの様子から、寂しい気持ちもあるが、新たな生活への決心をしたと感じた。

(2) 本入居前のグループホームでのエピソード

- Hさんは元気に過ごしている。体験中はお客様意識があったが、「Z Xホームで使用する連絡帳入れが欲しい」「この時間に使用するコップが欲しい」と希望を伝えるなど、ずっとグループホームで生活する気持ちになってきたのではないか。(相談支援専門員より)
- 体験終了数日前、支援者が面会した。Hさんの居室へ行き、支援者が「お手紙ありがとう」と伝えると、Hさんは「もう届いたの。〇〇さん元気」と次々に名前が出てきた。「みんな元気ですよ。利用者の皆さんには職員がついているので、心配しなくても大丈夫ですよ」と伝えた。(支援者より)

【この時点での関係者の所感・取組み】

M施設サービス管理責任者（支援者）	相談支援専門員
<ul style="list-style-type: none"> ○ 少しずつZ Xホームの生活に慣れてきた。 ○ Z Xホームと連携をとっていきたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 寂しい気持ちを抱きつつ、頑張るHさんの姿からたくましさを感じた。これは、Hさんが本来持っていた力であろう。

7 本クールのまとめ

(1) 関係者が意識した役割・配慮点等

M施設サービス管理責任者（支援者）	相談支援専門員
<ul style="list-style-type: none"> ○ Z Xホーム体験中、担当者と連絡を取り合った。 ○ 母、兄、Hさんも、自宅から近い環境を望んでいたことが大きなポイントだった。 ○ グループホーム体験だけではなく、日常の生活場面で充実した生活が送れるよう、余暇の充実も図った。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ Hさんの意向を継続的に確認。 ○ 担当者会議で支援の方向性を確認。 ○ 家族の理解を得る。 ○ Z Xホーム体験中のHさんの様子を確認する。 ○ Z Xホーム移行へ向け準備すべきことの整理。 ○ 継続的なZ Xホーム体験の調整。 ○ 施設とグZ Xホームの情報共有を図る。

(2) 意思決定支援専門アドバイザーのコメント

本クールでは、グループホームでの体験を複数回繰り返す中で、Hさん自身が、新たな生活へ期待と不安に揺らぎを覚えていく様子が窺えます。こうしたHさんの揺らぎは、Hさんのグループホームへの認識の変化によってもたらされたものと思われます。当初、Hさんはグループホーム見学や体験をイベント的に理解していたのかもしれませんが、イベントとしての楽しさと、施設からグループホームに転居をすることは大きな違いであり、グループホーム体験を通じて、自らの住まいの場としての実感が徐々に醸成されてくる中で、迷い・揺らぎが表出されていると言えます。

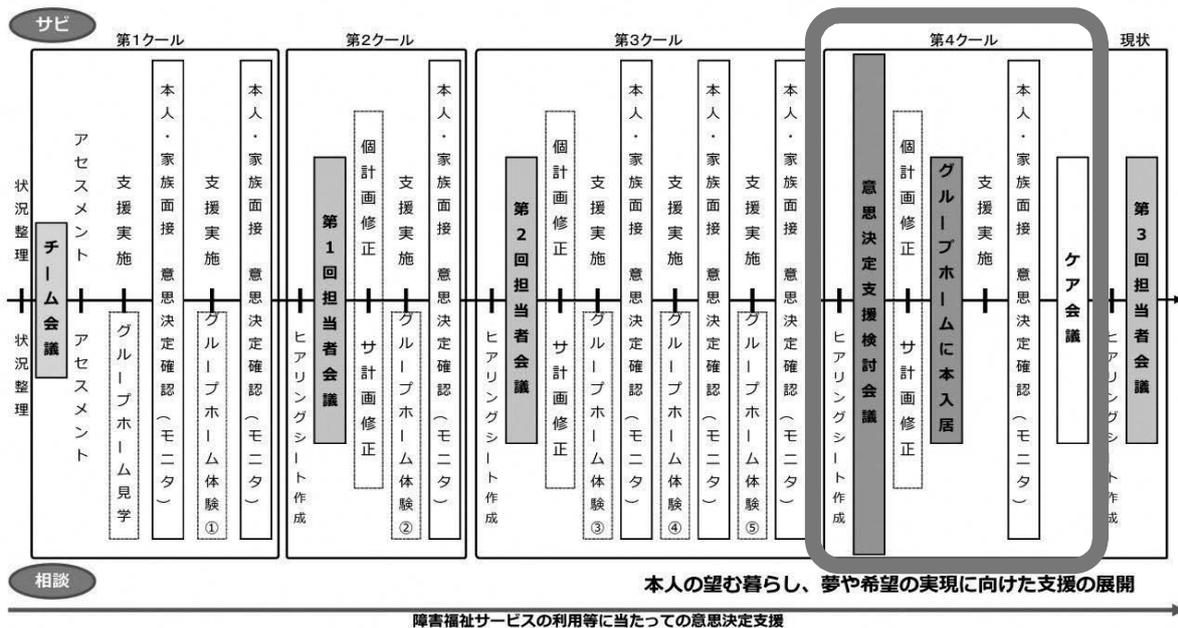
ガイドラインには、「意思決定支援に関わる職員が、本人の意思を尊重しようとする態度で接しているかどうかや、本人との信頼関係ができているかどうかの影響することが考えられる。」(p.4)とありますが、Hさんにとって、自らの希望にも苦悩にも耳を傾け、揺らぎを受け止めてくれる相談支援専門員やサービス管理責任者、施設の支援者の存在は大きな安心につながったのではないのでしょうか。

また、会議の場での「本人の意思がすべてだと思ふ」という家族の声も、Hさんの背中を押したと考えられます。

さらに、ガイドラインには「本人が安心して自信を持ち自由に意思表示できるよう支援することが必要」(p.4)との一節がありますが、Hさんに寄り添う人的環境が、いかに重要であったかを窺い知ることができます。

利用者の揺らぎに寄り添い続けることは、支援者にとっても苦しい時間ではないでしょうか。支援者は、「本人への支援は、自己決定の尊重に基づき行うことが原則である」(ガイドライン p.4)ことは理解しているはずですが、本人への指示や誘導等の“誘惑”に打ち克ち利用者とともに歩むことを選ぶとき、真の意思決定支援が実現することでしょう。

第4クール：グループホーム入居後の新たな生活の支援



1 本クールの概要

- 5回目のZ Xホームの体験中、Hさんと家族、関係者に意思決定支援専門アドバイザーを交え、Hさんの今後の生活を皆で応援する目的で、検討会議を開催した。
- Hさんから「Z Xホームは楽しい」「頑張れる」との決意表明があった。また、兄は、丁寧に何回も体験を重ねて、Hさんが気持ちを整理できて安心したこと、母も含めてHさんに会いやすくなったこと等への感謝を述べた。
- 意思決定支援専門アドバイザーからは、グループホームでの新たな暮らしをどのように作っていくかが大事だということ、相談支援専門員を中心にした新たな支援チームの構築が求められると助言があった。
- 4月に入り、HさんはZ Xホームに本入居した。Z Xホームでは、これまで入所施設では実現できなかったことに取り組んだり、家族交流もできるようになった。Z Xホームに入居して2か月半ごろから、Hさんが落ち着かなくなってきた。そのため、相談支援専門員が新たな支援チームを集めて、Hさんの支援を再構築するために、ケア会議を開催した。
- 生活環境が変わったことで、Hさんの新しい苦手が見えてきたので、新たな支援チームでHさんの支援のアイデアを出し合い、今後の支援に活かしていくことになった。

2 意思決定支援検討会議

(1) 会議の概要

(開催時期：チーム会議から約8か月後。5回目のZ Xホーム体験期間の2日目。)

ア 目的

Hさんの意思の最終確認と今後の生活の応援について。

イ 参加者

Hさん、母、兄、相談支援専門員（※チーム責任者）、Z Xホームの所長、N事業所の施設長、サービス管理責任者（M施設）、支援者（M施設）、担当ケースワーカー（援護地）、県障害福祉主管課職員、意思決定支援専門アドバイザー、

ウ 検討内容

① Hさんの思い

- ・ 逐語記録のとおり。

② 家族の思い

- ・ 兄は、「今日まで、何回も体験を慎重の上にも慎重を重ねて進めて頂いた。本人も気持ちを整理できたようで安心している。家からも近く、本人のところに訪問しやすくなった。これからもよろしくお願いします。」と述べた。

③ 今後の住まいの場の方向性について

- ・ 相談支援専門員は、今後もHさんの面会を継続すること、HさんもM施設に遊びに行くなど交流を継続し、今後も情報を共有することを確認した。
- ・ 今後も定期的に意思決定支援に係る会議の開催を確認し、家族にも了承を得た。
- ・ Hさんは「頑張る」と語り、Z Xホーム入居への強い意思・決意を示した。

エ 検討会議の結論

- このままZ Xホームの体験を続け、4月1日に本入居する。
- 体験期間中に新設される予定の新しいO生活介護事業所（以下「O事業所」とする。）を見学する。

■ 逐語記録：Hさんの思い

相談支援専門員：	「Z Xホームはいかがですか」
Hさん	： 「楽しい。お別れパーティーでケーキを食べた。友達にいろいろもらい握手した」
相談支援専門員：	「Z Xホームで頑張れそうですか」
Hさん	： 「頑張れる」
相談支援専門員：	「グループホームでどんなことをしたいですか」
Hさん	： 「日中活動の職員と別れるのが辛い」
相談支援専門員：	「別れるのは辛いですね」
Hさん	： 「Z Xホームでは頑張れる」

【この時点での関係者の所感・取組み】

M施設サービス管理責任者（支援者）	相談支援専門員
<ul style="list-style-type: none"> ○ 心配な面もあったが会議と体験を重ね、Hさんの気持ちに寄り添えたことで、Hさんと家族の希望を叶えることができたことを嬉しく思う。こうした経験は支援者としても嬉しい。次の力になる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 新たな生活を選択されたHさんには、好きなことを一緒に楽しめる新たな人間関係を構築してもらいたい。 ○ M施設の仲間との交流が長く続くと良いと感じた。

3 グループホームへの本入居

(1) 本入居後のエピソード

- 入居当初、Hさんは「寂しい」と涙ぐみ、毎日、M施設に手紙を書いていた。徐々に「ずっとこっちにいるんだよね。」とZ Xホームの支援者に話すようになった。
- 体験時にはZ Xホームの仲間を気にする様子はなかったが、「次は誰がお風呂に入るの」「メガネの人の名前は」等、他の利用者を意識するようになった。
- 訪問看護、訪問リハビリを開始。日中の通所先は2か所に増えた。「刺繍の仕事はどっち」と混乱する様子もあったが、紙に書いて説明することで理解していった。現在は、コーヒー豆の袋詰め、刺繍、受注作業等を頑張っている。
- 休日は、Z Xホームの支援者と近くのお店で買い物を楽しんでいる。移動支援事業所のヘルパーとの外出は調整中である。
- M施設の送別会でもらった花が枯れたので、その後、月に1回「お花の日」と銘打ち、Z Xホーム支援者と花を買いに行っている。Hさんは、花壇の花にも興味を示すようになり、支援者と一緒に花の水やりをするようになった。
- 自宅から近くなったため、毎月、家族と面会するなど交流を楽しんでいる。

【この時点での関係者の所感・取組み】

M施設サービス管理責任者（支援者）	相談支援専門員
<ul style="list-style-type: none"> ○ 医療的なケアの充実が必要。 ○ 引き続きZ Xホームと連携をとる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ Z Xホーム支援者から花のエピソードを聞き、施設では体験できないことが地域での生活では実現できることを実感した。 ○ Hさんも家族も望んでいた家族との交流ができていることがとても嬉しい。

4 ケア会議

- (1) 会議の概要（開催時期：チーム会議から1年1か月後。HさんがZ Xホームへ移行してから2か月後。）

ア ケア会議の目的

- ① 新たな環境、Hさんが落ち着かなくなってきたため、支援を再構築する。
- ② 新たなチームでの情報共有を図る。

イ 参加者

M施設の支援者、Z Xホームの所長、N事業所のサービス管理責任者、O事業所の支援者及び理事長、訪問看護ステーションの看護師、移動支援事業所の担当者、相談支援専門員、県障害福祉主管課職員

ウ 開催経緯

体験中に比べれば、Z Xホームでイライラすることは減った。4月から利用している新設のO事業所の利用が増え、新しい人間関係に馴染めないためか、Hさんは怒ることが多くなり、疲れが顕著に見られるようになった。そこで、相談支援専門員は関係者に声をかけ、ケア会議を開催することとした。

エ 検討内容

- M施設の支援者に参加してもらい、これまで、どのように関係性をつくってきたか等について意見交換をした。Hさんは、先の見通しが見えないと不安を感じることや、新しい人間関係に慣れるまでには時間がかかることなどを共有した。また、Hさんのストレスに注目した前向きな意見が交わされた。
- これまでの会議では出てこなかったHさんの苦手な事柄である、「見通しが持てない不安」「やりたいこと（作業）ができない苛立ち」「環境の変化への弱さ」「新しい人間関係をつくることの苦手さ」等が改めて見えてきた。
- Hさんの個性に施設の支援者がすぐに気づき、支援のアイデアを出し合った。
- 新しい事業所の支援者に対する試し行動についても、留意が必要ではないか。

5 本クールのまとめ

(1) 関係者が意識した役割・配慮点等

M施設サービス管理責任者（支援者）	相談支援専門員
<ul style="list-style-type: none"> ○ 家族に安心感を持ってもらうため、丁寧にグループホームに関する情報を提供した。 ○ Hさんは体調面に配慮が必要なため、障害者支援施設とグループホームで同じような支援ができるように、Z Xホームの担当者に支援上の注意点等を伝えた。 ○ Z Xホームの担当者と文書上の引継ぎだけではなく、Z Xホームの体験を通じて、細かい部分までやり取りした。 ○ 実家に近いこと、買い物ができる場所というHさんの望む生活と合致したのが、本入居先のZ Xホームであった。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ Hさんの意向の確認をする。また、Hさんの揺れる気持ちに寄り添う。 ○ Z Xホーム体験中のHさんの様子を確認する。 ○ 見学等を踏まえ、新生活に向けたサービスの利用調整を進める。 ○ HさんがZ Xホームへ移行した後のバックアップ体制を整える。また、バックアップ方策の一つとしてケア会議を開催する。 ○ Hさんが安心して新生活を送れるよう、M施設とZ Xホーム、他機関との情報共有を図る。また、新しい支援チームを構築する。

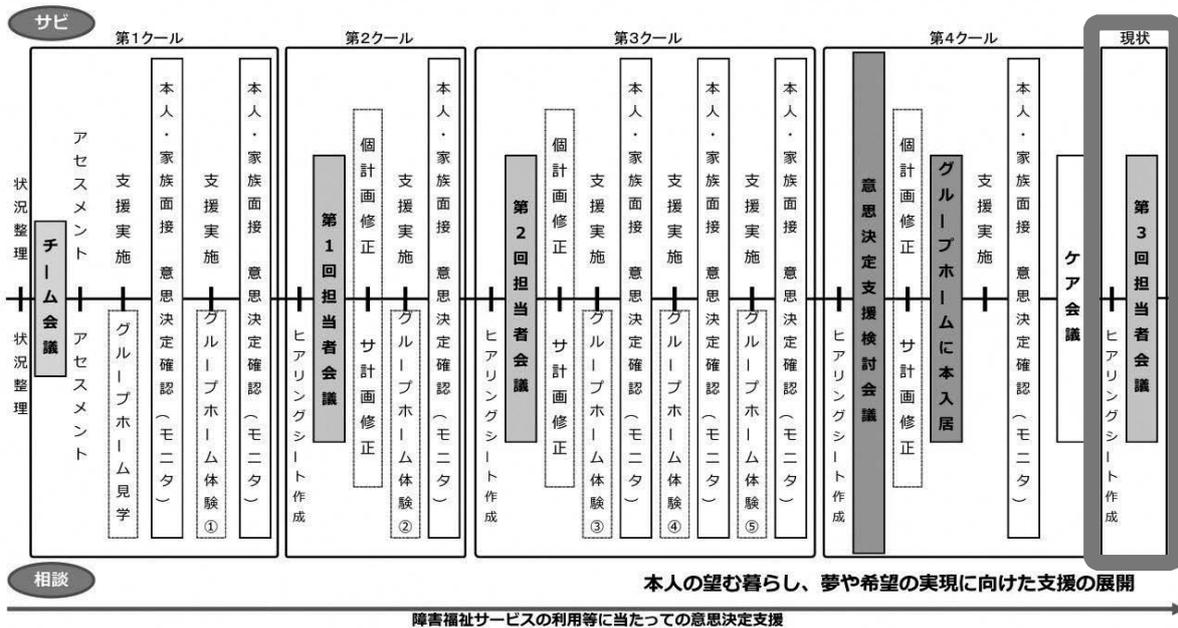
(2) 意思決定支援専門アドバイザーのコメント

本クールでは、Hさんがグループホーム体験を通して自らの住まいの場をグループホームと定め、新たな一步を踏み出していく局面です。Hさん、家族、関係者が一堂に集結する「検討会議」が開催され、Hさんがグループホームで「頑張る」と語り、グループホーム入居への強い意志・決意が示されました。Hさんは、関係者等による意思決定支援を受けていましたが、最終的には、Hさんの自らの力で意思決定をされました。Hさんの人生は、Hさん自身の意思によって物語が紡がれていくものであり、本人以外の者は、意思決定の“支援”役に徹することが重要です。

障害者支援施設からグループホームへの転居に伴う大きな生活の変化は、本人に何らかの影響を及ぼす可能性が予期されます。変化の影響を最小限に食い止め、ソフトランディングするために、障害者支援施設と移行先の支援関係者（グループホーム、生活介護、訪問看護、訪問リハビリ、訪問診療、移動支援等）との積極的な連携が必要となります。本クールでは、Hさんへの支援の継続性を担保するための関係者間の連携が、書面のみならず対面の場を設けるなど、丁寧に実施されています。

Z Xホームへの本入居後、Hさんは落ち着きをなくすなどの状況が見られたため、障害者支援施設の支援者と移行先の支援者により「ケア会議」が開かれ、支援の新たな方向性を議論しています。支援のアップデートは、旧居である障害者支援施設からの情報提供とバックアップがあつてのものであり、移行先の関係者にとっての安心にもつながっています。

第5クール：現在のくらし



1 本クールの概要

- HさんがZ Xホームへ移行してから4か月後、新しい支援チームとして情報交換と情報共有を図り、その後の生活について、Hさんから直接話を聞くため、担当者会議を開催した。
- Z Xホーム移行後の安定した生活を目指すため、具体的には、日々の関係機関の情報共有として、共通のアセスメントシートを活用すること、月間の予定表を活用すること、そして、スムーズな外出への事前準備を行うこととした。
- Hさんが地域生活移行をしたことは、施設で一緒に生活をしていた他の利用者にも影響を与えた。Hさんに会いたいという利用者が、Z Xホームで暮らすHさんを訪ねてきた。
- 新しい生活や人間関係に慣れ、楽しみの幅が広がってきている。イライラすることも減り、やって欲しいことも言えるようになった。大好きな家族にも会えるようになり、毎月の面会が楽しみになっている。

2 担当者会議（3回目）

- (1) 会議の概要（開催時期：チーム会議から1年1か月後。HさんがZ Xホームへ移行してから4か月後。）

ア 目的

- ① 移行後のHさんの様子も含めてHさんに直接話を聞く。
- ② 新たなチームメンバーによる情報交換と共有をする。
- ③ 今後のHさんの支援の方向性を検討する。

イ 参加者

Hさん、Z Xホームの所長、N事業所の担当支援者、O事業所の管理者及び運営法人の理事長、移動支援事業所の担当職員、ケースワーカー（援護地）、相談支援専門員、県障害福祉主管課職員

ウ 検討内容

- Hさんの言葉：「お祭りに行って楽しかった。焼きそば食べた。」「〇〇さんと仲良し。コーヒーを作っている。」「O事業所でも頑張っている。眠らないでちゃんと仕事している。」「仕事は大変じゃない。お給料ももらった。困っていることはない。」「〇〇君に勲章作ってと言われた。」「休みの日はDVDを見たり、買い物に行っている。」
- 相談支援専門員から、これからやっていきたいことを質問した。

エ 今後の取組み

安定した生活を目指し、当面、次のことを行う。

- ① 共通のアセスメントシートを活用して関係機関と情報共有をする。
- ② 連絡帳に挟んで使用する月間の予定表を活用する。また、スムーズな外出への事前準備として、Hさんが希望している映画を予約する。

【この時点での関係者の所感・取組み】

Z Xホームサービス管理責任者（支援者）	相談支援専門員	M施設サービス管理責任者（支援者）
○ Hさんの素敵的一面が分かると、支援者も和やかになる。そういうことが重なって、受け入れに至っている。	○ Hさんから前向きな発言が聞かれて嬉しい。 ○ Hさんへの理解が深まり、分かりやすく情報を伝えながら、Hさんの楽しみにつながることを提供してもらっている。	○ Hさんが自分の希望をZ Xホームの職員に話しができてから、Z Xホームの職員とも打ち解けてきていると感じた。 ※会議には不参加。状況報告を受けての感想。

3 Hさんの地域生活移行が他利用者へもたらした効果

【エピソード】

相談支援専門員が、M施設の利用者Kさんから、「Hさんはどこにいったの」「Hさんに会いたい」と話があったため、サービス管理責任者に相談し、O事業所とZ Xホームの見学も兼ねて、Hさんに会いに行くことになった。Hさんと再会したKさんは、「元気だった」「〇〇さんが会いたって」「〇〇さんが来たって」などと話しかけ、Hさんも「みんなどうしてる」「手紙を出したの、読んでくれた」「職員は」など話が尽きなかった。Hさんは、Kさんと一緒に、新設のO事業所の内覧会に参加した。Kさんは、相談支援専門員に会うたびに「Hさんのところに行きたい」「今度いつ行くの」と言っている。

【この時点での関係者の所感・取組み】

M施設サービス管理責任者（支援者）	相談支援専門員
<p>○ Kさんの日課の中にHさんの存在があり、Hさんがいないことでの不安要素が強いのかもしれない。Hさんが地域生活移行したことで、何らかの影響があるのかもしれない。</p>	<p>○ HさんがこうしたZ Xホームの体験を重ね、地域生活移行に向かっていくことが、一緒に生活をしてきた施設の利用者にも少なからず影響を与えていると感じている。</p> <p>○ 一緒に生活していた仲間が新たな生活をし、買い物等を楽しんでいる姿を見て、KさんはHさんのような生活をしたいと感じたのではないかと。</p>

4 現状

【エピソード】

Hさんがグループホームへ移行して半年以上が過ぎた。少しずつだが、Z Xホームの仲間との人間関係にも慣れ、楽しみも広がってきた。新しい通所先の仕事にも慣れ、楽しく自信をもって取り組めるようになった。給料を心待ちにしている。またイライラが減り、支援者に「こうして欲しい」と言えるようになってきた。

Hさんは「コースターを作ってみんなにプレゼントしたい」とも言っている。移動支援事業所のヘルパーとの外出が楽しみで、「次はどこへ行こうか」と迷っている。「映画館に行ったことないから行ってみたい」との希望も出てきた。母や兄にも定期的に会えるようになり、面会を楽しみにしている。また、最初は拒否を示していた訪問看護、訪問リハビリの支援者とも仲良くなってきた。

5 本クールのまとめ

(1) 関係者が意識した役割・配慮点等

Z Xホームサービス管理責任者（支援者）	相談支援専門員
<p>○ 基本的なHさんの支援は、マニュアル化していった。</p> <p>○ Hさんとの日々のやり取りで疑問に思ったことは、M施設のサービス管理責任者や支援者に直ぐに確認していった。</p>	<p>○ Hさんの思いを確認する。</p> <p>○ Z Xホームでの生活へ移行後、毎月モニタリングを実施し、Hさんの様子を確認する。</p> <p>○ 新たな支援チームを構築する。</p> <p>○ Z Xホームへ移行した後、Hさんが新設O事業所で新しい人間関係に慣れない様子があり、M施設での様子や支援対応、Hさんのストレングスを新たな支援チームメンバーに伝える。</p>

(2) 意思決定支援専門アドバイザーのコメント

本クールでは、障害者支援施設からグループホームへの地域生活移行後、一定の期間を経て、新たな生活の場への定着が新たな支援チームによって開始されています。Hさんに対する意思決定支援は、M施設からの転居が完了した時点で終了するわけではありません。時折、津久井やまゆり園利用者に係る意思決定支援は、転居がゴールとなっているという声が聞かれますが、それは全くの誤解です。Hさんがその人生の中で福祉サービス等を必要とし、その支援が続いていく限り、意思決定支援は継続されます。意思決定支援は不変ですが、そのお手伝いをする支援者には変動があります。だからこそ、意思決定支援の継続性・一貫性を担保するための、意思決定支援に携わる関係者間の適切なバトンタッチが重要となるのです。

本人中心の意思決定支援の貫徹は、支援者にも大きな力を与えています。前クールでは、送り出す施設側の支援者から「こうした経験は支援者としても嬉しい。次の力になる。」との所感が述べられています。充実した意思決定支援をなした支援者には、次の意思決定支援に向き合う力が与えられ、支援の質の向上と利用者の権利擁護の進展が図られていくことでしょう。

また、本クールでは、Hさんの地域生活移行が他利用者へもたらした効果が述べられています。Hさんと仲の良いKさんは、Hさんのグループホームへの転居を契機に、その視野が広がり、新たな行動を起こし始めました。Hさんは、グループホームでの新たな暮らしについて、自らの意思を形成・表現・実現しました。地域生活移行に挑戦したHさんの様子を垣間見ることで、Kさんの意思がどのように変化するのか/しないのか、関係者は温かな目で見守っています。HさんとKさんの関係には、ピアの力を強く感じるとともに、互いの交流を通して両者にエンパワメントが生じているように思われます。

事例まとめ：これまでの意思決定支援を振り返る

1 M施設支援者の声

(1) サービス管理責任者（支援者）

- 法人を超えて、制度等も活用しながらHさんがグループホームへ移行することができ、選択肢が広がった。悩むことも楽しむことができた。
- 地域生活移行をして良かったかどうかは、今後のことであり、Hさんが幸せならば良かったのだと思う。また、地域で暮らすためにはサポートが重要で、サポートがしっかりできていれば、地域生活移行ができると思う。もっと社会資源があればと感じた。

(2) 相談支援専門員

- Hさんは、言葉や態度で自分の思いをしっかりと表現してくれる方で、早い段階からグループホーム入居の意向を示されたが、それでも入居に至るまでは葛藤があり、随分悩んでいた。揺れるHさんの気持ちに寄り添い、最終的なHさんの本心を確認できるまで、経験を繰り返すことが必要だった。
- Hさんがどこまでグループホームに入居するということを理解しているのか、また、本当に地域で生活していけるのか、チームとしても不安に感じた時期があったが、繰り返しHさんの意思を確認し、Hさんの力、可能性を信じることで、Hさんの望む生活を一步実現することができた。
- 地域生活移行が意思決定支援の目指すところではないが、障害者支援施設とは違う生活の場を知ってもらい、体験して意思を表現してもらうことは大切なことだと言える。

2 地域生活移行後の支援者の声

(1) Z×ホームのサービス管理責任者（支援者）

- Hさんの意思を確認するというよりも、まずは一日も早くHさんを知ること、理解することに力を注いできた。Hさんの言っていることが本当ではないなど感じることも多々あった。その言葉の中にある本当の気持ちを汲み取る工夫を続けたい。
- Hさんとの関係性構築については、まだまだ十分ではない。きつい言葉も言われる。Hさんの状況や思いに寄り添える関係作りが今後の目標である。笑顔で生活できるように、表面上ではなく気持ちを汲み取るようにしていきたい。

(2) 相談支援専門員

- Hさんは新しい人間関係に慣れずに不安定な時期が続いたが、それでもM施設に戻りたいとは言わなかった。辛いこと以上に地域での生活には魅力があったのだろう。また、不安を抱えているHさんを地域の関係機関はしっかり受け止めることができたのだと考える。
- 現在も人間関係、興味関心、仕事に対しての意欲等に新たな広がりが見られている。改めてHさんの力、可能性を信じること、地域の力を信じることが大切だと感じた。

3 Hさんのコメント

- 支援担当者とチューリップの花を持ってきたのを覚えている。11月にお泊りして障害者支援施設に帰って、12月にまたお泊りに来たことは覚えているけど、細かな内容までは覚えていないな。障害者支援施設で2月にお別れ会をしてくれて嬉しかった。
- 今のグループホームでの新しい生活はとて面白い。一人だから楽しい。
- これからも、みんなとお仕事を頑張りたい。

4 意思決定支援専門アドバイザーのコメント

意思決定支援を通じて実現した「Hさんらしい暮らし」が引き続き展開されていくことを心から期待しつつ、最後に、ガイドラインの「各論」に示される論点に沿って、意思決定支援の取組みからもたらされた利点や評価を中心にコメントいたします。

[意思決定支援の枠組み/関係者、関係機関との連携]

Hさんを交え、相談支援専門員及びサービス管理責任者を中心とするチームによる意思決定支援を実施し、チーム会議、担当者会議、検討会議等の会議体を設け、多様な専門職が参画しています。Hさんのグループホーム体験は漫然と行われたわけではなく、体験のための準備、体験中の様子、体験の振り返りと次の体験に向けた準備といったPDCAのサイクルに準じて実施されています。なお、本事例における支援者の関与は「伴走型支援」（「地域共生社会に向けた包括的支援と多様な参加・協働の推進に関する検討会」最終とりまとめ、2019年12月）とも言える取組みでした。

[意思決定支援の根拠となる記録の作成/意思決定支援における意思疎通と合理的配慮]

意思決定支援の開始に際して、Hさんに関する（再）アセスメントが実施され、様々な会議において、新たな情報や状況の変化に応じた情報の追加がなされました。情報の収集については、Hさんに関わる支援者がHさんの意思表示の場面の詳細な記録を残していることが奏功しています。アセスメントに基づき、Hさんにとってふさわしい意思表示の方法等が工夫されています。

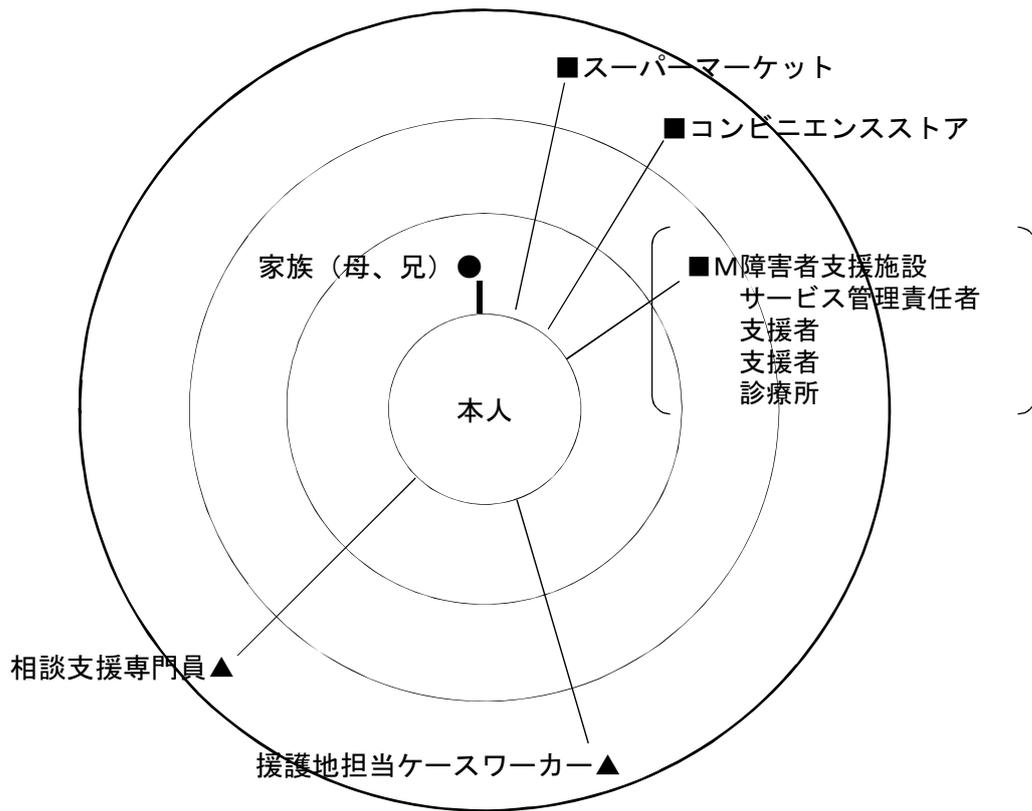
[支援者の知識・技術の向上]

意思決定支援の関係者については、県主催の研修会が開催されています。なお、意思決定支援がチームによって行われることで、チームメンバーの支援力の向上（障害者の地域生活に対する視座の醸成、支援における視野の拡大、多職種・他機関協働による意思決定支援の意義の共有等）に資するOJTの機会となりました。

[本人と家族等に対する説明責任等]

家族は、支援チームの重要なメンバーの一人であり、Hさんのパートナーとして関与されました。家族ならではの不安や懸念にもチームとして向き合うことで、Hさんの選択を尊重する立場へと変容するに至りました。

○ 地域生活移行前のエコマップ



○ 現在のエコマップ

